

聖火が もたらす灯

.....
ふるさとなみえを照らす
「復興の光」

この時期の復興に向けた主な動き

- R 2. 4月 請戸荷捌き施設で9年ぶりに競りが再開
- 8月 「道の駅なみえ」プレオープン
- 8月 「浪江町地域職業相談室」がサンシャイン浪江内で再開
- 8月 環境省福島環境事務所が「浜通り北支所浪江分室」を開設
- 9月 災害公営住宅「請戸住宅団地」26戸が完成、10月1日より順次入居開始
- 10月 「ゆるキャラ®グランプリ2020 THE FINAL」でうけどんが全国26位になり、2年連続で福島県内1位に輝く
- R 3. 3月 「道の駅なみえ」グランドオープン
- 3月 津島小学校が休校
- 3月 町内を「東京2020オリンピック聖火リレー」が巡行
- 3月 延べ1万人超が来場した「思い出の品展示場」が閉鎖



道の駅なみえ
グランドオープン（3月）



請戸荷捌き施設（4月）



東京オリンピック2020聖火リレー（3月）



福島県

森野 俊恵さん・裕子さん(川添)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋

取材日：1月24日 「令和2年4月 広報なみえ掲載」

空気が違う、ほっとする場所



▲仲むつまじく浪江での生活を楽しむ森野さんご夫婦

平成30年11月に避難先の山梨県から、新築した浪江町の自宅に戻った森野さんご夫婦。娘さん家族の家や、裕子さんのかかりつけの病院がある山梨県と往復する暮らしとのこと。不便さはあっても、浪江は空気が違う、ほっとすると笑顔で話してくださいました。

俊恵さん

4年前の春、定年退職を機に一人でいわき市小名浜に住み、「有害鳥獣捕獲隊」のメンバーとして、浪江町のイノシシ駆除の仕事を始めました。最初の頃は、河原に50頭を超えるイノシシが群れを成していることもありました。人間を見ても逃げず、銃で追い払うのが精いっぱいでした。今は、随分数が減ってきているけれど、それでも年間550頭くらいは殺処分します。中には、100キログラムを超える大物もいます。町のあちこちにわなを仕掛けてあり、仲間と一緒に火曜日と木曜日にわなを見て回り、わなにかかったイノシシを殺処分した後、富岡町の処分場に運んでいきます。

震災前の我が家には、獺期になると、大勢の仲間が集まってきました。20人を超える人でにぎわい、寝食を共にし、子供たちも一緒になって、さながら大家族のようでした。父母の代からのたくさんの

思い出の残る家でしたが、8年前に取り壊しました。人が住まなくなると、途端に家は荒れてしまいます。布団やら何やらたぐさんあった家財道具もほとんど処分しました。寂しいですが、仕方ありません。

裕子さん

2年前に山梨県の病院で、緑内障で失明直前だった目を手術しました。手術しても見えるようになるものではなく、半年後にはほとんど失明状態になりました。近くにいる人でも、顔の輪郭は分かっても、表情は読み取れませんし、テレビの画面もほとんど見えません。でも、大好きな庭仕事や食事の支度はできるだけするようにしています。震災前の庭には、竹林がありドウダンツツジがたくさん植えてありました。木々は全部切ってしまいました。が、震災後に植えた柿の木に、去年の秋には100個もの実がつきました。弘前大学のスクリーニング検査でも、食べても全く問題ないとの結果で、安心しました。これから、庭には季節ごとの花を植え、野菜も作っていったらと思います。

料理もできるだけするようにしています。天ぷらも好きで作るんですけど、イモの厚さはどうしてもばらばらになってしまいます。料理をするときは、夫がそばにいて手伝ってくれます。一人ではできませんが、二人でやれば何とかなるものです。洗濯や掃除は、夫の担当です。苦にせずやってくれます。

俊恵さん

震災前後、妻は、弟や母の世話をよくしてくれました。本当にありがたいと思っています。目が不自由になりつつありますが、目が多いと思うけれど、夫婦で力を合わせて浪江で暮らしたいと思っています。震災前に、親しく行き来していた近所さんも少しずつ戻って来ています。皆、70歳代前後で、10年先はどうなるか分からないといった不安はありますが、少しずつでも町に戻ってくる人が増え、震災前の暮らしに近づけたらと思います。



▲庭仕事大好きな裕子さん。取材日も花がきれいに咲いていました。

神奈川県



鎌田 正彦さん(幾世橋出身・神奈川県在住)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋

取材日：2月17日 「令和2年5月 広報なみえ掲載」

「見てもらえない、ほっとけない、みんなが幸せな社会になったらいいね。」



▲良き理解者である奥さん(千代子さん)と

小学校6年生まで、幾世橋小学校に在学。その後、ご家族の仕事の都合で神奈川県相模原市に転居された鎌田さん。相模原市の小学校の同窓会会長や「NPO法人神奈川県被害者支援センター」のメンバーとして活躍されています。

◆浪江町とのつながり

友達と幾世橋の川でドジョウやカジカ捕りをしたり、校庭の藤づるで「ターザンごっこ」をして遊んだりしたこと、給食のけんちん汁がおいしかったことなど、思い出がたくさんあります。自然が豊かでした。亡くなった父は、銀行員や「炭鉱マン」と職を転々としていました。幾世橋で魚屋を営んでいたこともありました。4男1女の子育てで忙しいなか、母も一生

懸命に手伝っていた姿が浮かびます。

私が小学校6年生のとき、叔父夫婦の世話で、家族そろって相模原市に転居しました。地元の小・中学校、神奈川県藤沢市の高校を経て、東京都内の大学を卒業、就職と、関東圏での暮らしが長くなりましたが、幾世橋小学校の同窓生とのつながりは現在も続いています。平成15年に浪江町「福島いこいの村なみえ」で開催された幾世橋中学校の同窓会に参加。翌々年、横浜で開催された同窓会には、20人ほどの人たちが集まりました。東日本大震災後、連絡が取れない人も多く、どこで暮らしておられるだろうか、元気だろうか、と気になります。

◆世界平和への思い

犯罪被害にあった人たちの中には、声を出せなくて諦めてしまったり、困っている人を「ほっとけない」性分で、そうした人たちの支援活動や防犯のための活動を続けてきました。また、国際交流協会の支援員として、イタリア、カナダ、ベトナムと

いった様々な国の在日外国人の人たちとの交流も進めています。

様々な活動を通して、「世界平和を願い、弱者市民の声を市政に！」届けたいという思いが募り、4年前の県議会議員選挙、昨年の市議会議員選挙の二つに立候補しました。残念ながら当選はできなかったのですが、思いは変わりません。弱者の声を政治に届けるために、活動を続けていきたいと思っています。

◆浪江町への思い

「ふるさと福島」への思いは熱く、数年前まで相模原市の福島県人会の会長も務めていました。現在は、「かながわ避難者と共にあゆむ会」のメンバーとして、福島県から神奈川県に避難して暮らす人たちの支援活動を行っています。福島第一原子力発電所の廃炉の問題など、難題が残る「ふるさと浪江町」、被災した人々への国からの支援がもっとあればと思います。私は陰ながら応援し続けたいと思います。そして、浪江町の人たちと会って励まし合うことができると願っています。



鹿児島県

諏訪園厚子さん(川添出身・鹿児島県在住)

取材者：NPO法人つなぎteおおむた 彌永

取材日：1月21日 「令和2年5月 広報なみえ掲載」

昔の浪江町に戻ってほしい。
心の底から、そう思っています。

結婚を機に鹿児島へ移られた諏訪園さん。震災直後、「うつくしま福島人会（福島県人会・鹿児島）」を立ち上げられました。発足当時から書き続けておられる何冊もの記録ノートには、打合せメモや活動が掲載された新聞の切り抜きなどがびっしり。故郷への温かい思いがあふれていました。



▲「福島復興支援ツアー」取材記事が掲載された新聞を手にほほ笑む諏訪園さん

震災直後、年齢も生活の状況も全く違うけれど、「故郷福島」のために何かできることを」との共通の思いを持つ3人が出会い、県人会を立ち上げました。「まずは、鹿児島県にいる福島県出身者へ呼び掛けてみよう」と、記者会見を開き、私が年長者なので会長を引き受け、事務局も私の職場にしたなら、会見翌日から職場の電話が「ジャンジャン」鳴って、若い職員が「何を言っておられるのか…。鹿児島のは、福島のほだけ、分かりません」と私のもとへ。九州の人には聞き取りづらい、懐かしい私の故郷の言葉で、受話器の向こ

うから切々と思いを伝えてくださいました。こうした鹿児島県在住の福島県出身の皆さんと、翌月に「第1回昼食懇談会」を開きました。懇談会は今も6月と11月に開催していますよ。春には「福島復興支援ツアー」を行っていただきます。「私、ここで生まれたのよ」と、浪江駅前に残っていた西病院の前で皆さんにお話ししたこともあります。今回が8回目ですが、鹿児島県の皆さんに「今だからこそ、福島県を見てほしい」と思っています。「報道だけではわからない。参加して良かった」との感想が、活動継続の励みです。

震災の年の秋、「浜通りに行く運転手がないから、荷物は福島駅止め」と言われ、県人会発起人の3人で、南相馬市まで鹿児島県のサツマイモや新米を運びました。決壊した堤防、バリケードでふさがれた道：自分の目で見たあの景色は忘れません。故郷にはいつでも帰れると思っていたから遠くに行けたし、遠くに居られたんです。昔のようには帰れない場所になったことが、悲しく切ない。それでも、スーパ―や歯科医院ができ、十日市祭も町内で開催される、この少しずつの「動き出し」をうれしく思っています。

群馬県



今野 義雄さん(津島出身・群馬県在住)

取材者：高崎子ども劇場 大澤・関根

取材日：1月22日 「令和2年5月 広報なみえ掲載」

帰ると「ほっ」とさせてくれる空気、津島はかけがえのない故郷！

今野さんは、津島小・津島中学校を経て小高工業高校を卒業後、東京都で就職。国立病院への転職を機に群馬県での生活を開始。過疎地の医療確保や医師不足問題に取り組む中で、「医療法人大戸診療所」の設立・運営に携わり、平成25年には地域医療に貢献した人に贈られる「若月賞」を受賞しました。

73歳となった現在も大戸診療所の顧問として過疎地の医療を見守る一方で、居住地である群馬県渋川市の「北毛保健生活協同組合」の理事として地域医療の充実に向けた取り組みを進めています。



▲浪江から離れて暮らしていても、多方面から浪江町のサポートを続ける今野さん

◆震災前後

故郷の津島には母が一人で暮らしていました。盆や暮れはもとより、事あるごとに帰省し、近所の人たちや親戚・同級生と会いだんらんするのが楽しみでした。震災直後、南会津町に避難した母のもとに駆けつけましたが、避難の長期化や高齢となってきた母の健康が心配で群馬県に来てもらいました。母はその後、娘のいる千葉県に避難し、昨年3月に93歳の天寿を全うしました。生きているうちに故郷に帰れなかったのが悔やまれます。

◆現在の活動

群馬県東吾妻町に避難してきた南相馬市や浪江町の人たちの医療支援や交流を始め、現地視察や福島県の仮設住宅や復興住宅での健康相談・お茶会などを行ってきました。とにかく、被災地浪江の現状を知ってもらうことが必要と、この8年、医療関係団体・自治会などの皆さんをこれまでに延べ80人余り、浪江町などに案内してきました。

帰還困難地域で9年も放置されたままの実家は、人が住める状況ではなく、母も亡くなったことから解体することになり

ましたが、先祖からの墓も故郷も守り続けたいと思っています。

「津島の獅子舞」や「田植え踊り」を懐かしく思いますし、いつも変わらぬ山や川、なによりも空気が違います。帰ると「ほっ」とするのが故郷です。震災前の津島には、「診療所を守る会」があり医師確保など、努力していましたが、この津島の思いが群馬県の過疎地で医療確保に携わってきた私の原点であったと思います。

◆これからの浪江町

津島の有志「ふるさと津島を映像で残す会」のドローン映像の完成が楽しみです。無くなってしまうかも知れない故郷の姿・実家の姿を、孫や次世代に伝えたいものです。

「帰還解除」されても戻るのが少ないのは残念ですが、迷っている町民が帰る判断のできる環境・子供たちが安心して帰れる状況を早く作って欲しいものです。町職員の皆さんも本当によくやっています。



佐々木 光恵さん(昼曾根)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：5月19日 「令和2年7月 広報なみえ掲載」

いろいろな人が訪ねてくれる本宮の暮らしは、 気晴らしになっています

本宮市市街地から車で約20分、阿武隈高原の里山に囲まれた白沢地区のご自宅を訪ねました。母屋の奥に2階建ての倉庫があり、その2階が光恵さんや夫の保彦さん（第2号「平成23年8月号」掲載）が訪問客を迎えたり、仕事をしたりする「基地」になっています。

現在、保彦さんは本宮市や大玉村に暮らす浪江町民でつくる「コスモス南達会」の会長として、光恵さんは会の女子部であり、手仕事を中心に活動する「サークルりんどう」のお世話役として活躍されています。



▲集いの場である倉庫2階のスペースでほほ笑む、
光恵さんと保彦さん

◆本宮に住んで、早や丸8年
あの震災当時、夫は消防団として役場の職員さんと一緒に町民の皆さんの避難を助けていたため、私や子供たちとは離れ離れでした。何か所か避難所を転々しましたが、比較的早く平成23年4月には、姉夫婦とともに郡山市田村町の借上げ住宅に入居し、夫も後から合流しました。
その1年後には本宮市に移り、栃木県に一時避難していた義母と夫との3人で暮らしています。この家は、義母に畑仕事を楽しんでもらえることと、二本松市の浪江町役場が近かったことが決め手になりました。

◆震災前は、二足のわらじを履いて

私は調理師として学校給食の仕事に長く関わった後、大柿簡易郵便局の局長を12年勤めました。一日にわずかししか訪れる人がいない郵便局でしたから、同時に、うどん・そばの「マンマや」も営んでいました。母を意味するマンマとご飯を掛けた店名だったんですよ。
震災のときは、3月14日に私たちが避難する直前まで、町内から避難して来る人たちに食事を出していました。店の従業員の一人は町から3時間半もかかったそうです。避難は津島だったのですが、ご飯を炊いたままの鍋釜も持って行って、みんなで食べましたよ。

◆誰でも、いつでも気軽に集まれる場所を

約4年前にこの家の古い倉庫が壊れたときに、大家さんに建替を相談したら、どうぞと快く言ってくれました。思ったので、思い切った人が集まれる場所をつくりました。避難した人たちは、言いたいことがあっても話せる場所が少ないんです。コスモス南達会の女性たちで「サークルりんどう」

を立ち上げ、赤十字などの助成金申請もしながら活動しています。大玉村や本宮市に住むメンバーは約10人で、編み物や縫い物をしながら、自由におしゃべりを楽しんでいます。十日市祭では販売をし、メンバーのやりがいも倍増しているようです。
また、1階の車庫ではバーベキューや季節の天ぷら会などをし、男性も交えて、にぎやかに楽しんでいます。

◆大震災と原発事故が招いた子供たちへの影響は、今でも気が掛かり

今の暮らしを手放しでは喜んでいませんが、4人の子供たちは独り立ちしましたから、つかの間のお休みをいただいているような感覚です。でも、子供や孫たちが遠くに離れてしまいがたいときに会えないことが悔しいです。その上、今年は新型コロナ禍の影響で、高校生と中学生になる孫たちの入学式や卒業式に行くことができません。残念でした。

あれから丸9年が過ぎましたが、幼かった子供たちが避難のために何度も転校をして、大人以上に複雑な気持ちやストレスを抱えたりしなかっただろうかと、今でも心配になることがありますよ。



樋渡牛渡八坂神社 再建委員会役員

樋渡牛渡行政区長 **鈴木 辰行**さん(樋渡)

八坂神社宮司 **田村 友正**さん(北幾世橋)

八坂神社再建委員会委員長 **佐藤 安男**さん(牛渡)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田

取材日：3月3日 「令和2年6月 広報なみえ掲載」

八坂神社の再建とともに、集落の新しい歴史が始まる

樋渡・牛渡地区の人たちの心のよりどころだった八坂神社は、震災時に拝殿や本殿などが倒壊。様々な人たちの尽力により、足掛け5年の歳月をかけて、昨年、再建されました。10月13日には竣工落成式が開かれる予定でしたが、台風19号の豪雨被害により、今年の1月12日に延期。当日は、避難先などから地区の人たち約80人が駆けつけ、にぎやかに再建を祝いました。

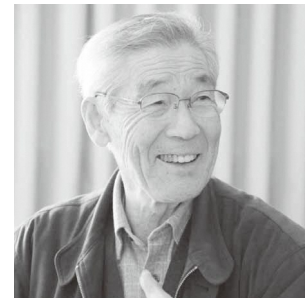
大切な神社の行事である夏の例大祭の再開ももうすぐです。この再建の取組に中心的に関わってこられたお三方に、震災からこれまでの暮らしと、神社再建にまつわるお話を伺いました。



鈴木さん



田村さん



佐藤さん

◆皆さんの震災当時の様子や今の暮らしをお聞かせください

鈴木さん その日は町議会に出席しており、地震発生直後に解散になりました。自宅に戻る途中、八坂神社の前を通ってみると、無残にも倒壊していました。真っ先に思ったのは「再建するのは大変だぞ」ということでした。自宅に戻ると納屋がつぶれ、停電のため自家水道も使えませんでした。翌朝、水くみなどをするうちに、原発事故の避難となり、津島方面に向かいました。妻の姉が住む南相馬市原町区に行き、一週間ほど世話になりました。妻の姉が住む南相馬市原町区に行き、一週間ほど世話になりました。内であったため、家族4人で埼玉県の娘の家に1か月ほど避難しました。

その後、東京都の東雲住宅団地に移って5年過ごし、今は息子の家族と名取市に一緒に住み、樋渡と行き来しています。樋渡の家では、自家用のキュウリやスイカなどを作っています。あちこちを転々としてきましたが、囲碁の趣味が功を奏して、基会所仲間がすぐにできるんですよ。救いでしたね。

田村さん 建てて間もない家でしたが、瓦が落ちました。当時、民生委員を務めていたのですが、近所の高齢者の安否確認をしました。その日は役場の隣の体育館に避難したのですが、翌日すぐに原発事故で避難になりました。国道6号は上下線とも

動かず、国道114号にも入れない。南相馬市原町区に住む妹を頼るために山回りで移動しましたが、そこすぐに避難となり、飯館村、福島市へと移った後、娘夫婦を頼って仙台市へ行きました。その後、白河市の妻の親戚宅の離れを借りることにりましたが、風が吹くと刃物で切られるような寒さなんです。そこで、浪江町に一番近いいわき市を選び、長男世帯と隣り合わせに住んでいます。家族や孫が頻繁に集まるので、楽しいです。

今は、皆さんが避難先で建てた家の地鎮祭が、宮司としての主な仕事になっていますが、この八坂神社と初發神社のことを考え、そろそろ幾世橋に戻ろうかと考えているところです。

佐藤さん あの日は檀家の集いで富岡町夜ノ森に出掛け、帰りの車で地震に遭いました。双葉町では国道6号が大渋滞。山手に迂回しましたが、ここも道路の段差がひどく、約60分もかけて帰宅しました。家は屋根瓦が落下、家財道具などが倒壊しましたが、電気や水道は使えました。一晩中テレビで各地の震災状況を見ていましたが、特に岩手県陸前高田市の倒壊した家屋などが海水に流されながら燃えている光景は衝撃的でした。

翌日早朝、妻と車で請戸や幾世橋の様子を見に行く途中で避難指示を聞き、そのまま津島へ避難。体育館に二晩泊まりま



【神社と再建報告会】

左上：竣工落成式当日の八坂神社
 右上：参拝者全員で記念撮影
 左下：八坂会によって奉納された神楽
 右下：樋渡牛渡田植踊保存会による田植踊り
 (令和2年1月12日撮影)



したが、暖房も食べ物も無く、本当につらかった。二本松市に一斉避難することになり、岳下体育館に移りました。二本松市が準備してくださったのか、段ボールや毛布、食事もトイレも整備されていました。そこから群馬県前橋市の弟を頼って約三週間。その後、知り合いから「地元に戻らないと情報が得られないよ」と言われ、二本松市東和町の体育館へ移りました。ここは衣服や食品などの物資もあり、知人も多かったので気持ちが悪くありませんでした。

それから、耶麻郡北塩原村にある裏磐梯グランデコスノリリゾート、五色沼近くの秋元旅館と移動しました。旅館の皆さんにはいろいろな配慮をしていただき、8世帯の皆さんとカラオケや餅つきをしたり、健康のためラジオ体操もしたりしました。その後福島市に移り、今は避難8か所目の一軒家。子供たちも福島市で暮らしています。

◆八坂神社再建の発端、実現までの経緯などを教えてください

鈴木さん 佐藤さんが一番詳しいから、お任せしましょう。

佐藤さん 震災で神社が倒壊した当時から、「普通に復元したい」「簡素に祠だけでも」など、いろいろな声が上がっていました。平成27年5月、避難先の岳下体育館そばの岳下公民館に地区住民が集まり、大字総会を開いたときに、再建検討委員会を立ち上げました。大字3役や氏子代表5人(後に6人)、集落の各団体長、区長経験者など学識経験者と合わせて12人と、宮司さんの13人で構成。みんな、再建には賛成のようでしたが、高齢の皆さんと若い皆さんとは思いが少し違いましたね。

再建の財源は、東京電力ホールディングス株式会社からの賠償金が約66パーセントで、田村さんが交渉から契約まで行ってくれました。また、共有地からの一括寄付や50数件にもおよぶ個人寄付が約32パーセントと、寄付予算の約2.3倍もいただきました。さらに福島県神社庁の助成金です。おかげさまで、参道の整備や土留めなどの付帯工事もできました。個人寄付がこれほど集まったことに、改めて皆さんの神社への思いを感じました。集落のお墓への通り道にある神社には幼い頃からの思い出などがあって、心のよりどころなんですよね。

再建検討委員会は再建準備委員会となり、最後の約2年は再建委員会へと名称を変えながら、約5年の歳月をかけ、昨年8月5日に完成、引き渡す予定でした。しかし、10月に予定した遷座式や落成式は台風の影響で今年1月12日に延期となりました。雨天続きで心配でしたが「終わりよければ、すべてよし」。見事な晴天となりました。神楽と田植踊りを奉納できると本当によかったです。

鈴木さん 八坂会による神楽と田植踊保存会、いずれも今は8人です。以前、田植踊保存会が小学生に教えていた頃の若い人たちも参加して、70代から20代、育てた人たちと習った人たちが一緒に踊りました。離れ離れになつているため、練習や行事に集まることが大変です。引つ張ってくれるリーダーと協力してくれる人たちがいなければ継続できないと思います。地域の芸能を継承していくには、地域と町の全面協力が必要ではないでしょうか。

◆最後に、八坂神社への思いを聞かせてください

鈴木さん この神社は彫り物が自慢で、再建にその一部を使いましたが、先達が残してくれた大切な神社を、私たち世代が次へつないでいきたい。浪江町に戻る、戻らないは別として、地元に来たときはいつでも神社にお参りできるようにしたいですね。

田村さん 集落の再建は難しいかもしれませんが、5年後、10年後という長いスパンで若い人たちに伝えながら、復興を成し遂げていたいただきたいですね。

佐藤さん 神社と住民のつながりというか、どこにいても古里を思う気持ちになつてほしいです。「家に帰るか」と言う人が一人、二人と増えていくような、復興の象徴となれたらいいですね。新しい機会をつくることで話すこともできるでしょう。7月には夏の例大祭も再開しますよ。



浪江町^{かき}花卉研究会

代表 川村 博さん(幾世橋)
荒川 勝己さん(加倉)
菅野富美恵さん(北幾世橋)
鈴木 好道さん・幸子さん(刈宿)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：5月22日 「令和2年8月 広報なみえ掲載」

花作りで浪江町を再興するために、これからも力を合わせて花を作る

浪江町内で花卉栽培に取り組む農業者や事業所に加え、新規就農者でつくる「浪江町花卉研究会」の月例勉強会にお邪魔し、中心的なメンバー4人と、出席された鈴木さんの妻、幸子さんも交えてお話を伺いました。

当日は、「新型コロナウイルス感染症」の予防のためマスクを着けたままではありましたが、楽しく、にぎやかなグループインタビューとなりました。



鈴木幸子さん



鈴木好道さん



菅野さん



荒川さん



川村さん

◆あの日の避難から浪江町に戻られた経緯を簡単にお聞かせください

菅野さん 震災前から室原川・高瀬川漁業協同組合で仕事をしていた、その頃から川村さんをよく知っていました。

伊達市保原町で避難生活をし、その間も通いながら、放流や放射線量の測定など川の仕事を続けていましたので、平成29年3月31日の一部避難指示解除とともに、浪江町に戻りました。

川村さん 第30号平成25年12月号掲載 福島市に避難しましたが、すぐに南相馬市に移りました。震災から2年目、以前から運営しているNPO法人Jinの事務所周辺が避難指示解除準備区域に再編されたことをきっかけに、平成25年4月1日に浪江町に戻りました。

最初はニワトリを飼って卵を出荷したり、野菜を作ったりしましたが、野菜から高い放射線量が検出されたことがきっかけとなって、震災後の3年目から花作りを始めました。

鈴木さん 震災直後は埼玉県に20日ほど避難し、その後、いわき市で暮らしました。刈宿の実家の母屋は解体しましたが、離れをリフォームして住んでいます。妻は、母が元気で小名浜にいますので、まだ向こうにいます。私も週に1〜2度くらいはいわき市に行っています。避難指示解除になってから、浪江町で何か仕事をしたいと考

えていたところ、川村さんの花作りを知り、平成30年8月頃から準備を始めました。地元農家に2反歩ほどの畑を借り、ハウスでの花作りに取り組み出したのは、その年の10月からでした。

荒川さん 第89号平成30年11月号掲載 秋田県に避難しましたが、一部避難指示解除後の浪江町で農業を再開したいと思い、平成29年4月から、準備のために毎月のように浪江町とを往復していました。翌年1月に戻り、作付けを開始しました。

◆浪江町花卉研究会のいきさつや現在の取組などについて教えてください

川村さん 花作りで町に貢献したいと、避難先から浪江町に通ったりしていた私たちが、勉強のために集まり出して2年目に、役場から農業者組織を作ったかどうかと言われたんですよ。原発事故の被災地からの再起を図るために、浪江町を花の一大産地にすることを目指して、平成29年8月19日に「花・夢・創みらい塾 浪江町花卉研究会」を立ち上げました。

みんなでいい花を作るために、肥料や水やり、温度管理、花の仕立て方など、技術向上と情報共有のための勉強会を月1



インタビュー風景▶



再開催しています。花卉農家や新規就農者などが集まって熱心に学び合うため、いつも2、3時間になっていますね。

中心メンバーは今日の出席者を含めて6人ですが、今年度中には花卉農家8人と一つの事業所、合わせて9件になる予定です。その他に、十数人のオブザーバーや応援者などがいます。

鈴木さん 震災前はアパレルの製造会社を経営していて、震災後は中国やインドネシア、ベトナム、ミャンマーなどへ技術指導や工場管理に行っていた時期もありました。

でも花のことは全くで、トルコギキョウすら知らなかったんです。いざ始めてみると、難度が高い品種というか、誰も彼もが簡単に作れるものじゃないと思います。ハウス栽培でしか作れませんから、設備投資も必要です。この花は一通りの知識を得たり、勉強したりしないと作れない。だからこそ、市場に出しても値崩れが少ないのでしよう。

女性を美しく装う仕事をしてきたので、美しい花を作ることには「美」という点で共通してい

て、うれしいですね。

菅野さん 北幾世橋の自宅前で、水田を転用した畑をお借りして作っていますが、作る土地が違うと同じことをやってもうまくいかないことも多いので、勉強会で川村さんからいただく中身の濃い資料を確認しながら、いろいろ試しています。メンバーの皆さんも、なかなか教えていただけなかった花レシピの「キモ」まで惜しげもなく情報をシェアしてくださいますし、何かあったら駆けつけてくださいます。相談できる仲間がいて、トラブルがスピーディーに解決できる。皆さんがいなければ、花作りはやれていません。

先ほど、以前から川村さんを知っていたと言いましたが、誰も浪江に帰って来ない頃から花作りに取組む、どっしり根を構えたような川村さんの姿や、その活動を取り上げた新聞記事などはいつも気になっていました。研究会の立ち上げを知って、私もその一員になりたい、川の仕事とは別に、私自身の仕事として花作りがしたいと思いい、参加しました。川村さんや事務局長の清水さんに憧れているんですよ。

荒川さん 加倉で花作りを再開した時に建てた3棟のハウスに加え、新しいハウスも使って仕事をしています。今、花木はサングミズキやヒユウガミズキ、ウンリユウヤナギなど4種類、切り花はメインのトルコギキョウ

ウ、ランキユラスやストックなど3種類ほど。栽培を始めて3年目のゴクラクチョウカ（ストレチア）は、今年花が咲くはずですが、その他にも試作中の品種があります。

農家は一人一人の仕事ですから、研究会の和気あいあいとした人の輪は本当に大切ですね。特にハウスでは独りきりですから、このメンバーのような温かい人たちと話ができることは大事です。

◆最後に、皆さんから花作りへの思いを聞かせてください

川村さん 浪江町の花作りをずっと応援いただいている華道家の假屋崎省吾さんが、来年のカレンダーに浪江の花を載せてくださるそうです。役場もフラワープロジェクトとして動画配信してくれるなど広報してくださって、本当に励みになります。

また、来年の東京オリンピック・パラリンピックで、メダリストたちに贈られる「ピクトリーブーケ」に福島県産のトルコギキョウが使われることが決まっています。浪江の花をいつでもエントリーできるような、最高級の花が出荷できる態勢を十分に整えておきたいですね。浪江ブランドの確立を目指して、今は栽培技術の取得や向上が一番。メンバーの経営を軌道に乗せるお手伝いはもちろんですが、若い人たちが花で生活ができるように、応援もしていきたい

たいと思っています。

菅野さん 基本通りにはなかなかいかないし、難しいことも多いですが、品質の良さを目指して基本に忠実に取り組んでいきたいですね。

荒川さん まず、きれいな花を咲かせたい。丈夫で長持ち、しかも高く売れる花作りを目指したいです。

鈴木さん 健康で少しでも長く、花を作りたい。80歳、いや、父が畑仕事をしながら90歳まで長生きしましたから、85歳かな。品質の高い良い花は作っていても楽しいし、ストレスがたまりません。「鈴木さんの花が欲しい」と言われるような花作りがしたいですね。

夫婦でできる仕事として、妻とも同じ目標を持ちながら、一緒に人生を歩いていきたいです。



▲取材終了後、参加者が1人加わって、すぐに勉強会が開始。ちなみに記念すべき第1回は、平成30年4月30日に行われたそうです



西内 隆さん・昭子さん(藤橋)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：6月21日 「令和2年9月 広報なみえ掲載」

我が家の農地は守れた。 これからは地区の人たちと営農を広げていきたい

西内さんご夫妻を取材した翌日（6月22日）の「河北新報」朝刊によれば、浪江町では今年のコメ栽培面積が昨年の3倍超となったことや、それでも震災前の約1割にも満たないことなどを改めて知りました。

浪江町で農業を再開され、その発展を願う隆さんの思いなどをお聞きした直後だけに、その数字に一層重みを感じるとともに、これからの奮闘にエールを送りたいと思いました。



▲隆さんが勤務する「福島いこいの村なみえ」の一室にて取材をさせていただきました。仲むつまじいお二人の笑顔が、とても印象的でした

◆**隆さん** 初めてコメを販売できた時、不安が消えました
あの震災の時は地元のホテルに勤務していた、津島から福島市へ避難しました。会社が茨城県筑西市に移転することになり、震災直後の5月から約2か月間、設備移設の計画や作業の一員として参加し、同時に生産も始まりましたが、平成29年12月に帰還するまで勤務を続けました。
浪江町の家は農家でしたので、環境省の除染が終了し、土地が返還された頃から、自分の土地の草刈りは自分の手で、週末には茨城県結城市から片道約3時間をかけて通っていました。約3町歩の農地を手入れしていました。往復に時間がかかることや、何としてもこの土地を守りたいという思いから、

◆**昭子さん** 今になって農業の楽しさを知りました
震災当時はコスモス保育園で調理員をしており、保育園が避難所になったために、家族の安否が心配でしたが、炊出しなどで忙しく、なかなか帰宅できませんでした。翌朝、夫や義母、子どもたちと一緒に福島市に避難をしました。翌年には義母と娘が茨城県に、長男は就職して埼玉県へ、学校の都合があった次男と私は福島市に残り、家族が3か所に離れたこともありましたが、その後、義母の介護のため、私も茨城県に移りました。
農業が大好きで「一人でも浪江に帰る」と言っていた義母は、帰還を果たせずに平成28年

会社を早期退職することを決心し、浪江町で仕事を探しました。たまたま「福島いこいの村なみえ」が再開のために募集しており、採用されました。午前中は農業をし、午後から夜間で勤務しています。
私たちの藤橋地区では平成30年から町の補助を受けながら、有志十数人が藤橋生産組合を立ち上げて水稲作付を再開しており、今年で3年目。中には栃木県宇都宮市や隣の南相馬市から通っている人もいます。10年、20年はコメを作れないと言われたこの土地で、収穫と販売ができた時には抱いていた不安が払拭できたんですよ。

◆**隆さん** 一緒に生きてくれた妻に感謝しています
藤橋地区だけでなく、浪江町では離農した人たちがたくさんいて、空いている土地も多いんです。これからの農業は個人ではなく、法人や組合を作って人を集めながら、規模の拡大を図る時代ですので、私もその一員として関わっています。
私たち藤橋生産組合では、JA（農業協同組合）の奨励品種であるタマネギも作っており、ちょうど今が収穫時期。西台の西内食堂では、かき揚げに使っていただいています。もちろん開業する道の駅にも卸したりしながら、販路を広げたいです。
妻には心から感謝しています。茨城県への避難から、浪江町に戻って農業をしようとした時もついてきてくれて、本当に助かっています。

6月に亡くなりました。
以前の私は農業には一切興味はなかったんですが、福島市にいた頃、市内渡利地区の花木農家や周辺地域への貢献を目的に活動する「NPO花見山を守る会」に勤め、畑仕事を手伝ったことがきっかけで、農業の大切さや楽しさが分かるようになりました。今は浪江にいろいろな園に勤務し、週末には夫の手伝いや家庭菜園をしながら、充実した日々を過ごしています。



小野田 恵佳さん(小野田)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：8月13日 「令和2年10月 広報なみえ掲載」

心に響く影響力を持った発信者になりたい

恵佳さんは千葉県柏市の麗澤大学3年生ですが、「新型コロナウイルス感染症」の拡大防止に伴い、大学がリモート授業となり、履修する授業はほとんど自宅で受講できるため、今は二本松市の実家でご両親や妹さんと過ごしていらっしゃいます。

この取材は、ご実家のすぐそばにある、NPO法人コーヒータイムが経営するカフェ「OBR I(オブリ)」で行いました。浪江を思う恵佳さんとの新しいご縁が、またここで生まれたらすてきなことでしょう。



▲カフェ「OBR I」の入り口にて。いろんな人に出会いながら、どうぞお健やかに

◆3・11と避難の記憶

大堀小学校の5年生でした。大掃除が終わって着替えをしていた時に地震が起き、全校生が校庭に避難しました。私と2つ年下の妹は一緒に、迎えに来た両親、兄と家に帰る途中に買出しに立ち寄ったコンビニは停電で、苧野のコンビニでやっと買物ができました。避難しようとした近所の屯所は地区の人たちでいっぱい、車中泊になりました。

避難指示の前に津島に避難して2日。埼玉県の親戚に1、2週間お世話になった後、二本松市の体育館から温泉旅館、その後アパートは2回引っ越ししました。3、4年前に浪江の家を壊して、今の二本松市油井の家に落ち着きました。

あの頃は大地震や原発事故、避難などに対する知識がなく

で、ただ親について行ったというか、引越しも突然で考える暇もなく、生活していくのに精いっぱいだったように思います。進学した二本松市立東和学校では、その環境に慣れることや友達を作ることに、とても時間がかかったことを覚えています。

でも、2学期に学級委員に立候補したことがきっかけで変わりました。高校では生徒会役員や部活動の部長を経験したことで、やりがいや達成感を得ることができ、リーダーとして、人として徐々に自信を持つことができました。

◆興味・関心が多いのが悩みの種

避難所で福岡県から来たボランティアの方に会ったことがきっかけで、中学生から高校生1年生の頃は、JICA(ジャイカ(独立行政法人国際協力機構))のように、世界で誰かを救える人になりたいと思っていました。県立安達高校に進んで2、3年生になると、やってみたいことが多すぎて自問自答の日々でした。

大学生になって、まちづくりや地域活性化、ジェンダーやLGBTなどのテーマに加え、心理学や音楽などにも興味をひかれていて、今は世界で起こっている出来事に目を向けながら福島や浪江町で活躍したい

と思っています。

母校の大堀小学校が廃校になると聞き、7月に、同級生8人と行きました。私たちの学年は30人でしたが、幼稚園から一緒の子もいて、何年たっても幼なじみの絆は強いですね。

8月1日にオープンした浪江町の道の駅に、家族と行ってきたのですが、温かさを感じて、いつか幼なじみと一緒にいきたい、地方で活躍したいと思います。人に関われる仕事なら、力を発揮できそうな気がします。

◆「新型コロナ禍」の一年

大学はオンライン授業になり、住んでいた寮も4月に閉鎖になったため、実家に戻っていますが、福島を知る良い機会と捉えています。福島の人たちともっと関わったり、福島を伝えるために、学びの機会を増やしたり、家族と話をすることで発想を切り替えています。この環境に適応して、もっと成長したいです。

7月から、フェイスブックで「SDGs朝活(エスディージーズアサカツ)」の運営メンバーになり、大学の協力も得ながら、様々な大人とプロジェクトに取り組んでいます。この活動を通じて、影響力を持った発信者、例えばインフルエンサーのような存在になれば、次のアクションにつながるのではないかと期待しています。



村井 阿理沙さん(棚塩)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋

取材日：9月5日（オンラインによる取材） 「令和2年11月 広報なみえ掲載」

今ある暮らしをより大事に思えるようになりました



▲地元の人たちとペットボトルのグリーンハウスのプロジェクトを立ち上げる

◆**青年海外協力隊の活動**
ジャマイカでの青年海外協力隊の活動は、思った以上に大変でした。行く前には、現地のNGOのサポートがあると聞いていたのですが、全くなく、ゼロから

◆**浪江町とのつながり**
震災の時、私は仕事でアメリカにいました。浪江町の家には、両親と当時は高校生だった弟が暮らしていました。地震の直後にSkype(電話)で父と連絡が取れ、無事を確認できたのですが、その後3日間連絡が取れず、不安が募って仕事も休んでいました。後日、連絡が取れ、家族全員の無事が確認できた時には、本当にホッとしました。浪江町の家は、祖父母が建て、暮らしていました。私たちは、双葉町で暮らしていました。祖父母が高齢になったこともあり、祖父母の家に転居しました。私は、大学進学を機に家を出たので、浪江町の家で暮らしたことはありません。でも、父にとっては、祖父母との思い出があり、自分たち家族も暮らした大事な家です。震災から9年を過ぎた今も草取りや家の中の整理に、避難先の茨城県から定期的に通っています。今年のお正月は家族4人で、浪江町の家で過ごしました。2泊だけでしたが、とても、心地良い時間でした。

◆**青年海外協力隊の活動**
ジャマイカでの青年海外協力隊の活動は、思った以上に大変でした。行く前には、現地のNGOのサポートがあると聞いていたのですが、全くなく、ゼロから

◆**浪江町とのつながり**
震災の時、私は仕事でアメリカにいました。浪江町の家には、両親と当時は高校生だった弟が暮らしていました。地震の直後にSkype(電話)で父と連絡が取れ、無事を確認できたのですが、その後3日間連絡が取れず、不安が募って仕事も休んでいました。後日、連絡が取れ、家族全員の無事が確認できた時には、本当にホッとしました。浪江町の家は、祖父母が建て、暮らしていました。私たちは、双葉町で暮らしていました。祖父母が高齢になったこともあり、祖父母の家に転居しました。私は、大学進学を機に家を出たので、浪江町の家で暮らしたことはありません。でも、父にとっては、祖父母との思い出があり、自分たち家族も暮らした大事な家です。震災から9年を過ぎた今も草取りや家の中の整理に、避難先の茨城県から定期的に通っています。今年のお正月は家族4人で、浪江町の家で過ごしました。2泊だけでしたが、とても、心地良い時間でした。

◆**浪江町とのつながり**
震災の時、私は仕事でアメリカにいました。浪江町の家には、両親と当時は高校生だった弟が暮らしていました。地震の直後にSkype(電話)で父と連絡が取れ、無事を確認できたのですが、その後3日間連絡が取れず、不安が募って仕事も休んでいました。後日、連絡が取れ、家族全員の無事が確認できた時には、本当にホッとしました。浪江町の家は、祖父母が建て、暮らしていました。私たちは、双葉町で暮らしていました。祖父母が高齢になったこともあり、祖父母の家に転居しました。私は、大学進学を機に家を出たので、浪江町の家で暮らしたことはありません。でも、父にとっては、祖父母との思い出があり、自分たち家族も暮らした大事な家です。震災から9年を過ぎた今も草取りや家の中の整理に、避難先の茨城県から定期的に通っています。今年のお正月は家族4人で、浪江町の家で過ごしました。2泊だけでしたが、とても、心地良い時間でした。

◆**青年海外協力隊の活動**
ジャマイカでの青年海外協力隊の活動は、思った以上に大変でした。行く前には、現地のNGOのサポートがあると聞いていたのですが、全くなく、ゼロから

◆**浪江町とのつながり**
震災の時、私は仕事でアメリカにいました。浪江町の家には、両親と当時は高校生だった弟が暮らしていました。地震の直後にSkype(電話)で父と連絡が取れ、無事を確認できたのですが、その後3日間連絡が取れず、不安が募って仕事も休んでいました。後日、連絡が取れ、家族全員の無事が確認できた時には、本当にホッとしました。浪江町の家は、祖父母が建て、暮らしていました。私たちは、双葉町で暮らしていました。祖父母が高齢になったこともあり、祖父母の家に転居しました。私は、大学進学を機に家を出たので、浪江町の家で暮らしたことはありません。でも、父にとっては、祖父母との思い出があり、自分たち家族も暮らした大事な家です。震災から9年を過ぎた今も草取りや家の中の整理に、避難先の茨城県から定期的に通っています。今年のお正月は家族4人で、浪江町の家で過ごしました。2泊だけでしたが、とても、心地良い時間でした。

◆**浪江町とのつながり**
震災の時、私は仕事でアメリカにいました。浪江町の家には、両親と当時は高校生だった弟が暮らしていました。地震の直後にSkype(電話)で父と連絡が取れ、無事を確認できたのですが、その後3日間連絡が取れず、不安が募って仕事も休んでいました。後日、連絡が取れ、家族全員の無事が確認できた時には、本当にホッとしました。浪江町の家は、祖父母が建て、暮らしていました。私たちは、双葉町で暮らしていました。祖父母が高齢になったこともあり、祖父母の家に転居しました。私は、大学進学を機に家を出たので、浪江町の家で暮らしたことはありません。でも、父にとっては、祖父母との思い出があり、自分たち家族も暮らした大事な家です。震災から9年を過ぎた今も草取りや家の中の整理に、避難先の茨城県から定期的に通っています。今年のお正月は家族4人で、浪江町の家で過ごしました。2泊だけでしたが、とても、心地良い時間でした。



▲ジャマイカ政府関係者および自治体の議員が見学(左端が村井さん)



鈴木 大介さん(請戸)

取材者：特定非営利活動法人山形の公益活動を応援する会・アミル 石山
取材日：8月21日 「令和2年11月 広報なみえ掲載」

地域の誇りとつながりを酒造りで甦よみがえらせたい



江戸時代からの老舗、浪江町の鈴木酒造店。現在は、山形県長井市で株式会社鈴木酒造店長井蔵として、伝統を継承しながら、新しい縁を結び「誇り持てる酒造り」をされています。10年ぶりに浪江町で酒造りを再開される鈴木さん。その想いをお聞きました。

◆浪江町から長井市へ移り住んでの酒造り

長井市に移り住んで9年になります。浪江町と長井市では気候が全く違い、長井市で酒を造るには、今まで培ってきた感覚が通じないところもあり、慣れるまで時間がかかりました。移り住んで、2年目の冬、元朝登山している人たちに誘われ、元日の午前3時ごろから山に登りました。長井盆地は水田地帯で散居集落。住宅の灯りがぼつりぼつりと未明の雪原の中に散りばめられていた。その灯りを見て感じたんです「ここは、良いところだ」と。それまでは雪が降ることや冬の辛さがありました。しかし、雪がなければ、良い水も流れません。また自分

たちは、雪を使って酒の貯蔵をしています。雪がないと何も始まらない。雪原の景色を見た時、この風土がすべて酒造りにつながっているのだと思えたのです。

◆長井市での経験を浪江町でのチャレンジへ

浪江町での事業再開は、長井市で事業を始めたときから

ずっと想い続けてきたこと。ここでやり方、事業の形をスマートにしたものが、浪江町の事業につながっていくと考えられています。現在は、小ロット多品種。一つ一つの製造ロットがあまり大きくないので、小回りが利きます。その強みを活かし、付加価値の高いものを生産していこうと思っています。

また、浪江町の原材料をメインに使うことで、浪江町の生産者の持続力を高めることを目指し、自分たちも力を尽くしていきたいです。

浪江町で造る酒は3つの柱で考えています。1つ目のコンセプトは、浪江町で暮らしていた人たちが懐かしいと飲んでもらえる酒。2つ目は、浪江町の人たちが誇りを持てる酒。海外でのコンクールに出しても賞を狙えるくらいの酒です。これを作るためには、原料が大切になってくるので、地元の農家さんと共に造っていききたい。時間がかかるかもしれませんが取り組んでいきます。そして3つ目は、自由な発想でチャレンジし造っていく酒です。

浪江町のものづくりで大事なことは、安全。浪江町の商品を買ってくれるお客さんは、何らかの価値を見出して購入してくれます。その期待を超える

ものづくりをすることで、浪江町のものづくりの魅力を発信できる。浪江町の環境と人には、大きな可能性があると考えています。

そして自分たちが、チャレンジできることはとても嬉しい。自分は年齢的に何でもできる世代で、経験と人脈を持っています。

人の縁で可能性を切り開いていける世代だと思っています。

◆被災地の食文化を次世代に

今、災害によって分断された地域の食文化が途絶えてしまふ危機感をもっており「甦る食のプロジェクト」にも取り組んでいます。浪江町の将来に不安感を抱いている人がいることは、致し方ないこと。ですが、どこで暮らしても浪江町のこと、忘れられない。浪江町で生きていたからこそその精神性が形成されていると思います。新しいものづくりを進める中で、伝統食・郷土食を残していきたい。また、土地の暮らし、伝統を自分たちで守っていくことの大切さも伝えていきたい。それらを次世代に繋げていくことで、地域のものづくりの魅力が増していくと考えます。皆さんにも協力してもらえたらありがたいです。



田中ヨリ子さん(権現堂) 瀬尾 恵子さん(西台)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：8月24日 「令和2年12月 広報なみえ掲載」

ちょっと不便だけれど、 やっぱり浪江がいい。毎日が楽しい

安達運動場応急仮設住宅（二本松市）で知り合ったお二人は、浪江町に戻ってから仲よしです。

一緒に「ジョイビート、やダンベル体操などの活動に参加したり、浪江町の子供たちと高齢者の交流を図ったり、環境美化活動に取り組むチームなみえG&Bでも活動されるなど、ふるさとの暮らしを生き生きと楽しんでいらっやいます。



▲瀬尾恵子さん(左)、田中ヨリ子さん(右)
せっかくの機会なので、あえてマスクを外していただき、撮影させていただきました

南相馬市小高区の花屋に勤めていて、午後4時ごろに帰宅しました。物が散乱していました。物が散乱していましたが、電気は使えたので寒さはいしよげました。翌日、次男と荻野小学校に避難し、長男夫婦らと合流。嫁の実家がある葛尾村へ向かいました。

その後、福島市内の「あづま総合運動公園」避難所にいた私の母を迎えに行き、さらに避難所を探しながら立ち寄った川俣町の道の駅で、福島県立西高等学校の避難所の貼り紙を見て、行きました。年寄りの体調が優れなかったものですから「ふくしま自治研修センター」に移り、最後は土湯温泉の「はるみや旅館」に半年間、お世話になりました。旅館には本当によくしていただき、安達仮設に移った後も孫たちが泊まりに行ったりするなど、今でもお付き合いがあります。別々に避難していた夫とは、ここで合流できました。そして安達仮設には6年ほど暮らしましたね。

安達仮設は500人以上、240棟の大部帯で、7班に分かれていました。同じ浪江町でも震災前は全く交流のなかった人たちが安達仮設で仲良くなり、一番楽しかったです。自治会が立ち上がり、住民の皆さんやボランティアの皆さんとイベントをしたり、福島大学の学生さんたちが3か月交代で取り組んだ「いるだけ支援」のお手伝いをしたりしました。卒業生たちとは今でも交流があるんですよ。そうした活動の一つに、カラオケに合わせて体を動かす「ジョイビート」がありました。浪江に戻ってからは、週2回、権現堂集会所を借りて活動しています。最初の頃は、週1回で20人くらいだったのですが、週2回に増えました。でも、新型コロナウイルス感染症防止のために4、5月はお休みしたり、6月から時間を短縮したり、換気や消毒をしたりしながら再開しました。7月になってやっと通常に戻りました。それと、役場の呼び掛けで

◆3・11発生から避難された時の様子などを聞かせてください

田中さん 地震が起きた時は、新町のアパートに一人でした。友人が来てくれ、その晩は友人宅に。避難指示が出た翌日からは、友人の親戚がいる葛尾村や栃木県宇都宮市でお世話になりました。

その後、千葉県にいた私の弟を頼りましたが、入院を控えていたので泊だけ。双葉町の友人が「さいたまスーパーアリーナ」（埼玉県さいたま市）に避難していると知って、弟に連れていってもらった後、二本松市の岳下体育館へ。ここではほとんど眠れなくて、川俣町の友人の家で約20日間、そして猪苗代町のホテルを経て、ようやく7か所目で安達運動場応急仮設住宅（以下、安達仮設）に落ち着いたんですよ。

田中さん 安達仮設は500人以上、240棟の大部帯で、7班に分かれていました。同じ浪江町でも震災前は全く交流のなかった人たちが安達仮設で仲良くなり、一番楽しかったです。自治会が立ち上がり、住民の皆さんやボランティアの皆さんとイベントをしたり、福島大学の学生さんたちが3か月交代で取り組んだ「いるだけ支援」のお手伝いをしたりしました。卒業生たちとは今でも交流があるんですよ。そうした活動の一つに、カラオケに合わせて体を動かす「ジョイビート」がありました。浪江に戻ってからは、週2回、権現堂集会所を借りて活動しています。最初の頃は、週1回で20人くらいだったのですが、週2回に増えました。でも、新型コロナウイルス感染症防止のために4、5月はお休みしたり、6月から時間を短縮したり、換気や消毒をしたりしながら再開しました。7月になってやっと通常に戻りました。それと、役場の呼び掛けで

ダンベル体操も月2回、やっています。

◆浪江にはどんな思いで戻られましたか。どのように暮らしておられますか

田中さん 震災の前の年に母が亡くなり、墓を守りたいという思いが強かったですね。それと、二本松にいた頃は、いつもよそ者という感覚が付きまとい、心穏やかではありませんでした。帰って来てからは、ぐっすり眠れるようになり、最高です。

私は一人暮らしなので、誰にも迷惑を掛けないように健康でいることが一番。だから、体を動かす活動には何があっても出掛けています。人間、気力が無くなったらおしまい。自分との戦いですよ。

ところで、町には飲食店が増えましたが、衣料品や日用雑貨を扱う専門店もあつちと思っています。なかなか商売は大変でしょうが、住んでいる人のためにぜひ実現させてほしい。町や商工会さんへお願いです。

瀬尾さん 夫は大工なので、震災後、仕事にかりつきりです。自宅を直す暇はありませんでした。西台の家は少し直して、夫と息子と3人で住んでいます。昨春秋、体調を崩しましたが、菜園をやったり、「ジョイビート」などに参加したりして、体を動かして始めています。

帰って来た浪江は、震災前とは気候も町の景色も違うような感じがしますが、不自由さはあまり感じません。毎日、楽しく暮らしています。3・11のような大きな地震が起きても、もう逃げたくはありませんね。



佐野 久美子さん(南津島)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：令和2年12月9日 「令和3年2月 広報なみえ掲載」

憧れていたトルコギキョウに挑戦。 大玉村で頑張っています



▲ご自宅の玄関前にて。安達太良連峰の山並みと広々とした田畑の景色が「南津島を思い起こさせる」とおっしゃる佐野さん

取材の当日は快晴。美しい大玉村の景色を眺めながら、佐野さんのご自宅を訪ねました。玄関には手作りのプリザーブドフラワーが飾られ、いかにも花を作る方のお家とお見受けしました。

ふるさと津島の料理も大好きという佐野さんがお茶請けに供してくださった美味しい白菜漬け。ごんぼ葉の凍み餅で作ったじゅうねん餅も、本当にごちそうさまでした。

◆避難を思い返して

あの時は、まず義母の姉の家に親戚10人くらいが避難し、お世話になりました。私たちは一旦14日に南津島に戻りましたが、15日に区長さんから避難を告げられ、親戚宅や二本松市東和の太田住民センター、岳温泉やみなし仮設住宅に移った後、平成24年9月から大玉村のこの家で暮らしています。うちの庭の前は牧草地で、安達太良の山々も一望できます。自宅の候補は2か所ありましたが、ここはふるさとの南津島に雰囲気似ていて、私が決めました。

避難で一番苦労したのは、当時、80歳を過ぎた義母だったと思います。震災後も入院を繰り返していましたが、南津島を出たことがなかった人でしたので、避難の中で認知症になり、不整脈や脳梗塞、大腿骨骨折なども患って、今年9月に大動脈瘤で逝きました。93歳でしたが、もう少し何かできることがあったのではないかと悔いが残っています。

◆大玉村での暮らし

私は震災前からリウマチを患っていることもあり、できる範囲で仕事をしたかったです。避難はしましたが、何もしないでね。南津島では

ンドウを作っていました。飯館村でトルコギキョウを育てている知人の仕事を見て、作ってみたいと思い、平成26年から始めました。

まず作業しやすい土地を探したところ、幸い隣の土地を借りることができ、10間(約18メートル)の頑丈なビニールハウスを2棟建てました。水が大量に必要なので自宅敷地をボーリング(掘削)して水を引き、大玉村は春先に風が強いので防風ネットも設置しました。トルコギキョウは1月中旬の土作りから始まり、7、8月に約6、000本の収穫をするまでかかりつきりになります。作り始めた1、2年は大変でしたが、大玉村で20年以上花作りをしている先輩方にアドバイスをいただきながら取り組んできました。今年は注文も多くて大変でしたが、何とか対応できました。東京の市場からも評価が高かったと聞き、やっと軌道に乗れたかなと感じています。

花は農協と農産物直売所に納めるほか、自宅で売ったり、隣組に配ったりしています。近所の方々と仲良く付き合いたいですから。花が終わった後のビニールハウスでは、無農薬のいろいろな種類の野菜を作っています。私たちが食べたいし、花作りの肥やしを吸わせるというか、残渣を利用するためです。この野菜も友人・知人やご近所に差し上げる楽しみがあるんですよ。

◆ふるさと津島への複雑な思い

夫は定年後に南津島へ帰りたいようですが、私は病氣もあり、ここに馴染んでいるのであまり考えないようにしています。けれども、原発事故さえなければ離れることのなかった懐かしいふるさとへの思いは募るばかりです。それに、町の幹線道路や帰還困難区域の一部の除染などの話は聞かえてくるのですが、我が家周辺の状況はあまり分かりません。町に申し上げたいことは、除染をせずに解除しないで欲しいんです。

話は変わりますが、大玉村や本宮市などに住む人たちの手づくりの会「りんどうの会」での出会いは私の支えになっています。避難することがなかったら、きっと浪江地区の人たちとは知り合うこともなかったでしょう。大きな収穫、財産だと思っています。



▲8月初め、丹精を込めたトルコギキョウの傍らで。今年はセレブホワイトなど白い花の気が高かったそうです